

Volvo Gdynia Sailing Days

2015 RS:X Youth World Windsurfing Championships レポート

July 11th-18th 2015 Gdynia, Poland

2015年7月20日

日本ウインドサーフィン協会 小菅寧子

今大会は7月11日～18日まで Gdynia, Poland で開催され、例年行われている VOLVO Gdynia Sailing Days の期間に開催されました。本大会へは東京2020オリンピック準備委員会、JSAF レース委員会より派遣していただき、これまでにない視点、立場での貴重な経験をさせていただきました。参加にあたり主催団体の主メンバーである Tomasz Chamera 氏、またレース委員長の Eva Jodlowska 氏、ご尽力頂いた方々に感謝したいと思います。

大会概要 ; VOLVO をメインスポンサーに開催されている今大会である Gdynia Sailing days は開催期間に複数のレガッタがあり、RS:X クラスの直前には OP、29er、Open Bic クラスが同時開催されていた。また直後には Laser4.7 の大会が控えており大きなフリートを抱えて行われている。RS:X Youth World championships には男子98名、女子38名、日本からも男女1名ずつ（池田健星選手、渡邊純菜選手）がコーチを帯同して参加していた。

<会場、陸上施設>



左 : レガッタオフィス 一階に Jury Room、二階が Regatta Office

右 : 大会スポンサーの VOLVO 車の展示ブース 街中でも Volvo 車の展示がありフラッグがいたるところにあってスポンサーの大きさを感じた



左:メディアブース スポンサーボードと表彰台 右:大会会場見取り図



左:Winner ボード 右:Notice ボード(毎朝この場所でブリーフィングがあった)



大会会場風景 左:ハーバー内 右:ビーチに設置されたRS:X用テント



左:ビーチに設営されたテントとフェンス 右:テント内にRS:X艇を保管

このハーバーには過去の遠征中に立ち寄ったことがあったため初めての場所ではないことを思い出したが海上経験はない場所であった。レガッタの開催期間中ハーバーは艇で埋め尽くされていたが、今大会では RS : X クラスは隣のビーチにテントが設営され、計測、艇の保管、毎日の出艇帰着をすべてビーチで行った。ビーチはフェンスで区切られ、海水浴客との使用エリアを区別していた。また、出艇の際には GPS を受け取り Tracking System が導入されウェブサイトで見ることができた。

<ブリーフィング>



毎朝運営と Jury、コーチ陣でブリーフィングが行われた。ブリーフィングではその日のスケジュールや前日のレースに関する事、コーチ陣から運営に対しての質問、Jury からコーチ陣にルールに関する事などの意見を聞くなどの場であった。誰もが良いレースをしたいということをベースにお互いを尊重した場となっていると感じた。今大会のレースオフィサーである Eva は女性であるが、コーチ陣からの問いにも常にクリアな意見で話し方もとてもはっきりとしていて好感がもてる人柄であった。その他、RS : X セクレタリーの Andrus Poksi 氏（写真右手前）や IJ の皆さんとも知り合う事ができ色々な影響や助言をいただいた。Andrus 氏は 9 月に江ノ島で開催される Asian Windsurfing Championships にくる事になっており私も実行委員会メンバーなので再会することになっている。とても紳士的な素敵な方でした。

<海上運営>



左:海上本部船 レースオフィサー、タイムキーパー、フラッグ兼記録係の3人と船長(ホーン担当)が乗船 右:フィニッシュ船 船長(リコーダー係)と記録係の2人が乗船(英語が通じないでしたが問題なし)



左: IN/OUT 両ゲートマーク船 ゲートの設定とC旗の対応を迅速に一人で行っていた。片手にフラッグを持ち片手で運転、ホイッスルを鳴らして対応していた。右: 上マーク船(マーク①と②を担当)各ボートは本部船でGPSを取ってマークを設定、基本的に一人ですべて行っていた



スタートアウター船: 竹竿に滑車を取り付けてオレンジ旗を高い位置で掲揚できるよう工夫 ドライバーと記録係の2人



海上本部船は女性のみ この国にいて感じたの

はLady ファーストなところ 運営も女性が指示を出して男性が形作るサポート的なものを運営チーム Eva に感じた。またスタッフは皆一定以上の知識を持っておりそれぞれの役割についてマスターしているメンバー（チーム）でお互いに信頼し役割をきちとこなしながらも船の上の雰囲気はとても和やかで陽気であった。

<レース概要>

大会は男子が2フリートに分かれて予選・決勝を行うクオリファイシリーズ、女子が1フリートによるオープニングシリーズで、3フリートをトラペゾイドコースにおいて時間差で回してレースが行われた。コースは下マークをゲートマーク（+3p/3s, +4p/4s）で設定し、大会期間中は最終日を除いて陸からの西よりの風で（240～330）振れ幅がかなり大きく、風の強弱も激しかった。陸風は気象予報から予測することが難しい傾向のある土地で、どのように変化するか予測がつかない海面であることが土地的な前提条件であるとブリーフィングでコーチ陣に伝えていた。コーチ陣も非常に困難なコンディションでのレース運営を理解し抗議などがでることもなかった。レースオフィサーの Eva は何度もこの海面でのレース運営をあらゆるクラスで行い慣れている様子で、変化に対する対応がとてもクリアで難しい状況でありながら判断が素晴らしいと感じた。

今大会では海上本部船は船長を除いてすべて女性、他のボートも必要最小人数で対応されており、トラペゾイドコースの海上運営を9人/5隻のボートでこなしていた。それぞれが役割をマスターしていて段取りも素早く無駄な時間もない素晴らしい運営チームであると感じた。ポーランドでは運営に携わるスタッフはみんな講習を受けるシステムになっているようで簡単なものから段階分けされた資格を持っていると言っていた。スタッフに関してもみんなある程度の知識を持っていて育成体制がしっかりとしていると感じた。

レースとしては、スタートではRS:Xのレースマネジメントポリシーに準じてI旗、ゼネリコの後には黒色旗ルールが使われていた。また、各レグでかかった時間と全体のターゲットTimeを意識し、風の変化に伴い素早い対応によってS旗またはC旗を使いコース変更を行っていた。だらだらとしたところのないレース運営というのがとても印象的であった。

このようなことを考えるベースとなるRS:Xクラスにおけるレースマネジメントの資料、各クラスの風速によるスピード基準をもとにしたターゲットタイムの資料、その他レース運営に関する資料などをevaが提供してくれたことにより色々な知識を得る事ができた。

また、ある一日では、今大会でSIに書かれている規定に違反した選手のRCから選手に対する審問にobserverとして立ち会わせていただいた。当初RC側と一緒にJuryルームに入ったつもりでしたが、Juryの方々の配慮で判決を決める際にも同席させていただいた。

また着順に対する救済を求める審問に立ち会って思ったこととして、フィニッシュアウトマークにもGPSを取り付けてFラインを把握できるようにしておくことが有効であると思った。GPSチェックによる着順の確認もレコーダーと記録以外の手段として必要であると思った。今回はFアウトマークにGPSを取り付けていなかったこと、またビデオなどもなかったため救済されなかった。

<まとめ>

今回、皆さんの配慮によって色々な視点から大会を考える機会をいただき感謝しています。3月に自分の知識向上のために受講したARO資格取得から4ヶ月後にこのような経験をすることになるとは思っていませんでした。もっと英語

力もあげたいですし人間的にも成長する、成長せざるをえない機会をいただいたと思います。

国内の大会運営にはここ数年で携わる機会が多くなっていましたが、海外で選手ではなく大会・運営側の立場を経験してみて感じた事は、ユースの大会でしたが世界選手権という大きな大会においてもシリアスになりすぎることなくやるべきことをやって、それぞれにセーリングが好きであることが伝わる人たちが楽しんで運営に携わっているという良い雰囲気を感じたことでした。

なんでもそうですが、本当にその事が好きであればどのような形であれ楽しめるもので、逆に楽しんでいなければうまくいくものもいかな場合があります。またその道の上に立つ人は深く極めた人、多くの経験を持つ人。またこういった機会をいただいた際により多くを発揮、吸収できるようこれからも過ごしたいと思います。最後に、昨年この大会に参加された岡田氏により主催側の Tomasz 氏に 2020 東京オリンピックにむけたトレーニングへの協力を要請されていたことで成立した今回の遠征であり、両氏の計らいに感謝したいと思います。

